

英語教科書と異文化理解

鈴木賢司

Crosscultural Understanding in English Textbooks

Kenji SUZUKI

要 旨

『学習指導要領』に基づく日本の英語教科書は、異文化理解のための教材が豊富に含まれている。このことは、教授法として主流となっているコミュニカティブ・アプローチと相俟って、英語によるコミュニケーション能力の育成に効果があるのであろうか。日本の英語教科書は、扱われている異文化教材の数が非常に多く、同じ教科書でとり上げている自国文化の数よりもはるかに多い。この意味で、日本の教科書は異文化理解が内容上の主軸となっていると言ってよい。一方で中国は、TOEFLのデータでは日本人受検者よりも高得点を示しているが、その教科書には異文化理解という特徴はほとんど見られない。むしろ、中国でのさまざまな生活の場면을英語を用いて表し、会話の場面においては英語を用いて自国（中国）文化を相手に理解させようという、自文化への強い傾倒さえ見受けられる。つまり、異文化理解を促進することが、コミュニケーション能力を育成することに直接つながってはいないと言える。「話せる英語」が、日本の英語教育の課題であるならば、異文化理解と「話す力」との関係を捉えなおす必要がある。

キーワード：異文化理解、自文化、英語教科書、日本、中国

1. 序 論

言語の概念・機能面を教授法の中心に置いたコミュニカティブ・アプローチが1971年にD.A. WilkinsやJ. van Ekによって提案されてから¹、1980年代になると、日本の英語教育もそれまでのオーラル・アプローチからコミュニケーション重視へと変化していった。特に近年、いわゆる「話せる英語」への社会的需要と文法・訳読方式を偏重する英語教育に対する批判を背景にして、文部省の『中学校学習指導要領』（平成元年）は、その目標に「積極的にコミ

コミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことを謳い、各学年の目標も、第1学年には「初歩的な英語を用いて、身近で簡単なことについて話すことができるようにするとともに、英語で話すことに親しみ、英語で話すことに対する興味を育てる」、第2学年には「初歩的な英語の文や文章を用いて、自分の考えなどを話すことができるようにするとともに、英語で話すことに慣れ、英語で話そうとする意欲を育てる」、第3学年には「初歩的な英語の文章を用いて、自分の考えなどを話すことができるようにするとともに、英語で話すことに習熟し、英語で話そうとする積極的な態度を育てる」、と「話せる英語」教育への指向を強く打ち出していた。さらに、今回の『新学習指導要領』²においては「実践的コミュニケーション能力」の育成が謳われていることから、日本の英語教育は、これまで以上に「話せる英語」へと傾倒しつつあると言える。

コミュニケーション能力の育成とともに、日本の英語教育の特徴は、異文化理解を重視する点にある。これは、『中学校学習指導要領』の「指導計画の作成と内容の取り扱い」第2項「教材は、その外国語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史などに関するもののうちから、生徒の心身の発達段階及びその興味や関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとする」を反映し、「世界や我が国の生活や文化についての理解を深め、国際的な視野を広げ、公正な判断力を養うのに役立つ」ことを目的としている。

このように日本の英語教育は、コミュニカティブ・アプローチを中心に用いたコミュニケーション能力の育成及び国際理解、すなわち異文化理解が理念上の特徴と考えられる。これによって英語によるコミュニケーション能力を育成することが意図されているのであるが、このような理念を基に編纂された中学校の英語教科書が、実際どの程度日本人のコミュニケーション能力育成に役立ってきたかは疑問である。いわゆる「会話力」を測る客観的尺度が現在のところ存在しない以上、日本の英語教科書が、どの程度コミュニケーション能力の育成に役立ったか、あるいは役立たなかったかは明確ではないが、現在も続いている「話せる英語」という視点からの英語教育への批判、及びコミュニケーション能力育成を目的とした英語教育の小学校への導入を考慮すると、少なくとも日本の英語教科書が意図してきた目的は達成されていないと考えられる。

一方、隣国の中国の人々の英語によるコミュニケーション能力には定評がある。「話す力」が測定されているわけではないが、最近のデータでは、TOEFLの点数においても日本人受験者を60点近く上回っている³。英語と中国語の構造的類似を指摘する見方もあるが⁴、英語圏に対する異文化という面では、同じ東洋の国である日本と本質的な差があるとは考えられない。

日本の英語教科書と比較して、中国の英語教育で用いられている教科書には、異文化理解という面ではどのような特徴が見られるのであろうか。本稿では、異文化理解という面から日本と中国の英語教科書を分析・比較し、コミュニケーション能力育成との相関を考察する。

2. 日本の英語教科書に見る異文化理解

本研究では、採用校が多いという意味で、代表的な中学生向け英語教科書である *New Crown*⁵ と *New Horizon*⁶ を分析の対象とする。また、異文化理解を扱った教材とは、日本以外の外国文化、すなわち、外国の風物の紹介やその由来、外国人の習慣などを扱っている言語材料を言うこととする。例えば *New Crown* 1 では、be 動詞の疑問文を導入するために、日本人の生徒と中国から来た生徒の間の次のような会話が設定されている⁷。

中国人生徒： Are you a baseball fan?

日本人生徒： Yes, I am. Are you a baseball fan too?

中国人生徒： No, I am not.

I am a table tennis fan. It is popular in my country.

この会話文の背景には、日本では野球が盛んであるが、中国では卓球の方が人気があるというスポーツに関しての文化の違いがある。いわば、この2人の間に存在するインフォメーション・ギャップを埋めるために、be 動詞の疑問文という言語材料が用いられているのである。

異文化理解を扱うこのような教材を、地域、歴史、自然・気候、生活（衣食住）、習俗、言語、スポーツなどに分類すると表1、2のようになる。

両教科書とも、扱われている異文化は世界各地に及んでいる。項目数では、*New Crown* 1, 2, 3が28項目に対し、*New Horizon* 1, 2, 3は12項目であるが、これは、*New Horizon* では未来、宇宙、地球環境といった文化には直接関係しないテーマがとり上げられているためである。ページ数が、両教科書とも練習問題を除いて各学年70ページ程度であることを考慮すると、異文化理解という面では、日本の英語教科書は多様な文化を数多く扱っていると言える。では、これに対して中国の英語教科書では異文化はどのようにとり上げられているのであろうか。

表1 *New Crown 1, 2, 3*

地域	歴史	地理・気候	生活	習俗	言語	スポーツ	計
アメリカ	3		3	2			8
カナダ					1		1
イギリス	1	1		1	1		4
オーストラリア	1	2	1				4
ケニア				1			1
モーリシャス		1					1
中国		2		2	1	1	6
韓国				1	1		2
モンゴル		1					1
計	5	7	4	7	4	1	28

表2 *New Horizon 1, 2, 3*

地域	歴史	地理・気候	生活	習俗	言語	スポーツ	他	計
アメリカ	1		1	1				3
カナダ							1	1
イギリス		1						1
オーストリア							1	1
アフリカ							1	1
ブラジル					1			1
バングラデシュ		1						1
シンガポール				1	2			3
計	1	2	1	2	3	0	3	12

3. 中国の英語教科書に見る異文化理解

中国の英語教科書は、首都北京を含む全国75%に及ぶ学校で現在使用されている⁸という意味で、代表的な *Junior English for China*⁹ を分析の対象とした。この教科書は三年制の初級中学用で、第1, 2学年は(上)(下)2冊, 3学年は1冊から成り、練習問題を除いた本文は、(上)が各60ページ、(下)及び3学年用が100ページ程度で、日本の教科書と比較してかなりの分量である。教科書の編集の仕方は、オーラル・アプローチとコミュニカティブ・アプローチを

折衷した教授法に基づいていると考えられる。異文化をとり上げている教材としては、第2学年（上）に次のような会話文が見られる¹⁰。

- LI LEI : Sam, what are you going to do tomorrow?
 SAM : Nothing much. Why?
 LI LEI : We're going to watch a football game.
 Would you like to come too?
 SAM : I'd love to. What kind of football, American or soccer?
 LI LEI : Soccer. But we don't call it soccer in China. We call it football.
 SAM : How many players are there in a team?
 LI LEI : Eleven. And we play the game with a ball like this. Is the game popular in the USA?
 SAM : Not very popular. We play American football in the USA. In our game we also have eleven players in a team, but our ball is like this.
 LI LEI : Oh! Is that a ball? Aren't all balls round?
 SAM : Not in the USA.

中国人の生徒 LI LEI が、アメリカから来た SAM に対して、中国でのサッカーの呼び方とやり方を説明し、それに対して SAM がアメリカン・フットボールを説明する、という場面が設定されている。言語材料は「勧誘」を表す *Would you like to ... ?* とそれに対する応答の仕方が復習項目として扱われている。前掲した日本の英語教科書 *New Crown* の例のように、インフォメーション・ギャップと、復習項目ではあるが目標言語材料との間に関連は見られない。

異文化に言及している部分を、地域、歴史、自然・気候、生活（衣食住）、習俗、言語、スポーツなどに分類すると表3のようになる。

表3 *Junior English for China 1, 2, 3*

地 域	歴 史	地 理・気 候	生 活	習 俗	言 語	ス ポー ツ	他	計
アメリカ		1				1	1	3
カナダ		1						1
イギリス		1	1	1		1	2	6
オーストラリア		2						2
計	0	5	1	1		2	3	12

前述したように、この教科書は、日本のものと比較してかなり分量が多いが、とり上げている異文化は非常に少ないと言える。地域も、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリアの4か国に限られ、イギリスに偏重が見られる。さらに、アメリカの実在する都市の地図が用いられている課もあるが¹¹、地図から情報を読み取る言語活動を行うための材料であって、異文化理解は全く目的にされていない。異文化理解を取り上げているのは、教科書よりも、むしろ「学習の手引き」として市販されている参考書の方であり、それには、例えば次のような異文化が、「課外知識」として扱われている¹²。

英美人忌讳询问别人的私事，英国人往往把“不管闲事”当作自己的座右铭。美国人十分强调个人权利和自我价值，强调个人的自由。在日常交往中，如果有谁以“您吃饭了吗？”“您去哪儿？”“您多大年纪？”“您工资多少？”这类的话问候对方，则会被认为是不礼貌的。

(英米人は他人のプライバシーを尋ねることを避け、イギリス人は、しばしば「余計なおせっかいはしない」ことを自分の座右の銘にしている。アメリカ人は、個人の権利と価値、自由を強調する。日常の付き合いの中でも、もし「ご飯を食べましたか」、「どこに行くのですか」、「何歳ですか」、「給料はいくらですか」といった類の質問をすると、礼儀正しくないと思われる可能性がある。)

このように、教科書に準拠した参考書の方では異文化が扱われているが、それはあくまで学習者の参考としてであり、異文化に言及することはあっても、母語（中国語）で解説を加えているだけである。参考書という性格があるにしても、日本の教科書に見られたような、異文化に関わる情報を目標言語で学習させるという設定ではない。

これまで、日本と中国の英語教科書において、異文化というものがどの程度扱われているかを調べてきたが、明らかに日本の教科書の方が、扱われる項目の数も多く、地域の多様性にも富んでいる。では、「異文化」ではなく「自国の文化」に関しては、どの程度、また、どのように扱われているのであろうか。「異文化」と「自国の文化」の間の扱われ方に、日本と中国の間でどのような違いが存在するのであろうか。

4. 英語教科書に見る自国の文化理解

異文化理解についての分析と同様に、日本と中国の英語教科書の自国の文化に言及している箇所を、地域、歴史、自然・気候、生活（衣食住）、習俗、言語、スポーツなどに分類すると表4のようになる。

これを異文化理解の項目の数と比較すると、*New Crown* は、異文化28に対して自国の文化は7、*New Horizon* は、異文化12に対して自国の文化は6、中国の *Junior English for China* は、異文化12に対して自国の文化は15という結果になり、中国の教科書が、日本よりも自国文化の理解に重点を置いているのは明らかである。さらに、日本の教科書では、自国の文化は、例えば次のように¹³、異文化との中立的な比較という型をとることが多い。

- Tom : How do you show “Be quiet”?
 Ken : We put a finger on our lips.
 Tom : It’s the same in the USA.
 Ken : Yes. This is as popular as the V-sign.
 Tom : Then, how about the gesture for “Come here”?
 Ken : We move our hands and fingers like this.
 Tom : Oh. It’s different. In the USA it may mean “go away.”

これに対して中国の教科書では、次の例のように¹⁴、異文化との比較の場合でも、自国文化を中心に説明する傾向が強い。

Look at the diagram on the right. It shows what has happened to the forests of the USA in the last 350 years. In 1620, about half the USA was covered by forests. In 1850, about a third was covered by forests. Today the forests have almost gone. A lot of good land has gone with

表4 日本と中国の教科書における自国の文化

	歴史	地理・気候	生活	習俗	言語	スポーツ	計
<i>New Crown</i>				6		1	7
<i>New Horizon</i>	1			5			6
<i>Junior English for China</i>		6		9			15

them, leaving only sand. Today, too many trees are still being cut down in the USA.

China does not want to copy the USA's example. So China has built a new Great Wall across the northern part of the country. This time, it is a "Great Green Wall" of trees, millions of trees. (以下略)

日本の教科書の場合、その背景に文部省の『学習指導要領』の規定があり、異文化のみではなく自国の文化も取り上げられていることは当然と考えられるが、中国の教科書では、異文化として扱われる地域は英語圏の数カ国に限られ、自国文化が数の上で異文化を上回っている。さらに、異文化が扱われる場合でも、そのとり上げ方はかなり表面的であり、次の例のように¹⁵、その文化そのものが理解される対象になっているとは言いがたい。

JIM: Where are you from?

BRUCE: Can you guess?

JIM: You're from Australia, aren't you?

BRUCE: Yes, I am. How did you guess?

JIM: The way you speak! Which part of Australia do you come from?

BRUCE: Plumtree—that's a small village not far from Sydney. (以下略)

上のJIMの発言の中には、オーストラリアでは英語の発音が異なることが示唆されているが、その具体的な例には全く触れていない。総じて中国の英語教科書は、異文化に対する関心、異文化を追求しようとする姿勢に乏しく、自文化中心主義が強く押し出されていると言える。

5. 結 論

『中学校学習指導要領』に従って編集された日本の英語教科書には、日本文化も含めて世界中の多様な文化の紹介が見られる。さらに、教材によっては単に異文化の紹介にとどまらず、インフォメーション・ギャップを埋めることと言語活動が結びついている教材も見受けられる。このようなコミュニカティブ・アプローチを中心に据え、異文化理解（国際理解）を目的とした教科書は、主題が多方面、多分野にわたるために、変化があつて学習者が飽きない内容になっていると思われる。学習者には、英語で多様な自文化、異文化に接し、それを理解することによって、コミュニケーション能力の向上が期待されているのである。

これに対して中国の英語教科書は、取り扱われている文化という面では、圧倒的に自国文化が中心であり、異文化をとり上げる場合であっても、異文化そのものを紹介し、説明することはほとんどない。異文化は、構造主義的に言語材料を編成する際の中立的な記号として扱われているのである。この結果、言語活動の場面は自国の文化圏内に限定され、母語（中国語）による日常生活が英語に置き換えられただけなので、日本の教科書と比較して、内容的には単調であると言える。

このように、日本と中国の英語教科書を比較・分析すると、一見、日本の教科書の方がコミュニケーション能力育成という目的に適っていると考えられるが、実際には、中学校で3年間英語を学習しても話せるようになれないという批判が依然として根強い。一方で、中国の人々の英語でのコミュニケーション能力を考慮すると、少なくとも、〈異文化理解＝コミュニケーション能力の育成〉という図式は成立しないと言える。「話せる英語」を習得するためには、異文化理解は必ずしも必要ではないのであろう。相手を理解することと相手に自分の主張を伝えることとは、コミュニケーションの場では表裏一体ではないからである。この意味で、『新学習指導要領』で謳われている「実践的コミュニケーション能力」を目標にするには、「英語を話す」、「英語で主張する」とはどういうことなのかを再考する必要があると考えられる。

注

1. Ek, J.A. van. 1976, *The Threshold Level for Modern Language Learning in Schools*, Longman.
2. 「新学習指導要領—英語教育はどう変わるか」『英語教育』, 大修館, 1999年6月.
3. 「世界25か国の外国語教育」『英語教育』, 大修館, 1999年3月, 147頁.
4. Reischauer, Edwin. 1977, *The Japanese*, Harvard University Press. を参照.
5. *New Crown English Series*, 三省堂, 1999年.
6. *New Horizon English Course*, 東京書籍, 1999年.
7. *New Crown English Series 1*, 三省堂, 1999年, 24頁.
8. 「世界25か国の外国語教育」, 136頁.
9. *Junior English for China*, 人民教育出版社, 1999年.
10. *Junior English for China—Students' Book 2A*, 人民教育出版社, 1999年, p. 27.
11. *Ibid*, p. 38.
12. 雷静編『初中英語（初中三年級用）』経済日報出版社, 1996年, pp. 28–9.
13. *New Crown English Series 2*, 68頁.
14. *Junior English for China—Students' Book 3*, p. 70.
15. *Junior English for China—Students' Book 2B*, p. 62.

鈴木賢司

参考文献

- 本名信行他, 『異文化理解とコミュニケーション1・2』, 大修館, 1994年.
大谷泰照監修, 「英語科における国際理解教育」『英語教育』, 大修館, 1995年5月.
佐野正之他, 『異文化理解のストラテジー』, 大修館, 1995年.
武本昌三, 『英語教育の中の比較文化論』, 鷹書房弓プレス, 1994年.
田崎清忠, 『現代英語教授法総覧』, 大修館, 1995年.